

2383

三才因縁辨疑



三才図説并疑下目録

- 一 一 集術の図説
- 二 二 幽妻ハ心守りたる図説
- 三 三 化玉の
- 四 四 狐つさ
- 五 五 古いあしひで叶いぬ図説
- 六 六 人相の図説

三才図説下

三才図説下疑



七 土膏の洞子

八 凡の吹因縁

凡の吹因縁

一 築術の因縁

凡の吹因縁

一 築術の因縁

築ハ五行の務ニテ廣キ事ナリテ術ト九章
ノリテ天竺方知の終極する所トモ信傳大なるが
人ナリ侍者土農工畜ノ後ニテハ知りて
ノ術ニテ五行の務トハ一ハ水の務ニハ火の務ニ
三ハ土の務ニハ金の務ニハ土の務ニテ土を
殺しりふ又土を殺しハ水ノ二ハ土ノ二を
加へて
土を水ノ務トハ一ハ火ノ二ハ土ノ二を
加へて
土を火ノ務トハ一ハ土ノ二ハ土ノ二を
加へて
土を土ノ務トハ一ハ土ノ二ハ土ノ二を
加へて九を

細も益多し一丸分も人々兼用をせしむる
まじりたるハミを黄三首の喜おを一刻引の
並後に却て善後時内引外引の兼
あくを黄三首の上へ一刻百二千を加へて
を黄三首の二千より如内へ一刻引れ
張を後元時八十引下の一換あり一換の
拜目を争ね高に人も悦ばね換の下の換
ありを黄三首の二百を一刻引のに九まで刻べ
一を黄三首の百四十引下とあふゆを一刻
引ハハカ九を黄三首の二百とあふたハハ三首
くの仕を換を拂ねみもお換十二の九の

換を十四の九にて拂ふ換のうりにも小判
を後時換の仕を二引一引一引一引一引一引
お換十二の九の小判ハハカ九の換あり一換の時
小判のお換十二の九の小判ハハカ九の換あり一換の時
換のお換十二の九の小判ハハカ九の換あり一換の時
七トセリニとも換あり一引ハハカ九の換あり一換の時
祿元大換の同かむにケ礼公家も兼用を
とらねるを九を三首のものを二に大勢を
はるるを換一二首多けは三首の庫に礼
兼用のの換人をあつる酒工九分六厘は
兼用をあらたしてハ規矩も換多し一引

一 醫者の考へ、葬儀を承へたるは、
 後、醫術とりの葬儀とりの儀、
 月一奉り、元三方の中にして、君に依仗の死
 刻あり、おりに法業、各分に死刻に、
 ちうく死刻、大方せざるの、
 十人、八人、
 死刻多し、
 騰將の、
 言ふ、
 して、
 を、

二 幽霊

世は、
 化、
 世、
 或人、
 墓、
 心、

ふくのたつに遠くをゆくけりしをたまたも我
を懐きさせてゆくしとておのをさへ
付さずに飛んでゆく人もの標の下にこれ
飛らぬべしあるてをを逃れんことを
ふ事しけし元よき分利もあはれぬ
形もてをを原し懸しとて終日の矛に
しをもさくは二時余のふはしはたやう
果もあきさかけしはねがらぐそと立去
けりしとて火屋の後ろをぬきつゝもて
堂のすをのりしけしはねがらぐそと立去
りし白きしとておのをたまたもたまたもて

白くしをたまたもたまたもて
りやんせられぬとては定めてはなれぬ
いふはせんともいふも堪へし力につくは
青い鳥を死せし死人の二族も去人たれて
一灰のせにあり骨を拾ひてぬけりけり
天のゆけしはひしとてありし一鳥の
おをを長をたをせぬとてはなれぬ
の上までおれりしとてはなれぬ
乃者たたみに懸りしとてはなれぬ
おのりしとてはなれぬ
後へてはなれぬ

さういふけさ境まで推流の力をもち、後
て舟をもちこむせいのり、楫の下にせし
ひ流を明の夜あけへて、戻りの人
大勢あつたも、こも流れ、運河の終
のくまびれまて、まう、馬今、まで、一舟入ふ
後、一たのま、痛もや、こや、も、財の事
を、さ、い、せ、ん、も、其、も、う、う、は、る、こ、ま、居
や、う、子、ゆ、け、る、も、極、今、昔、我、や、う
美、と、恐、ハ、其、の、こ、ま、い、ハ、恨、す、た、者、こ
け、者、の、こ、ま、い、と、い、ハ、昔、い、と、恨、て、合
付、け、る、故、あ、り、一、決、意、を、打、明、て、た、ん

と、さ、い、け、る、が、し、や、く、ま、ま、て、ハ、恨、病、の、こ、ま、と
あ、り、な、れ、て、互、の、恥、こ、と、さ、い、さ、う、ね、非、ま、て
け、る、ハ、や、う、身、の、こ、ま、を、疑、極、ハ、大、に、不、得、
や、い、融、や、佳、ハ、現、在、の、事、ハ、あ、く、多、く、ハ
皆、や、う、事、事、に、て、ハ、昔、の、う、り、な、さ、ま、あ、
を、上、に、う、こ、の、故、お、ま、も、は、る、融、や、佳、ハ
ハ、恨、う、い、ま、り、と、や、け、る、や、隣、の、て、い、と、ハ
い、あ、く、実、の、こ、ま、美、と、さ、い、か、ま、た、も、流、
を、い、め、も、流、り、こ、ま、一、疑、ふ、今、も、た、れ、ハ、言、
を、い、流、り、け、る、故、律、の、あ、り、の、せ、い、こ、ん、ま、
流、り、上、ハ、あ、の、や、あ、り、ハ、あ、る、ま、い、と、さ、い

幾より伝くに決り傳へ一たび形もほむれば
百太ありに味か習ひて著く後人傳
傳く秘の胸の内も又も著の種を
くくらけは種か二人きんは傳幽嘉ハ実
も傳守ゆりにも傳すも下に秘の胸
の内ありあるおがれはありたいにし
たいにし守伝の傳の傳は伝有伝
亦有亦母しりかきし實ハ也く著も傳す
互に新しひななれた也く著とこれ別
也く著と之傳中にさひひひ墨りるを
て一公は恐一板とハハヤいりりの著の本の

傳まではる也く著とくんもそを多化而執
しりや著人の一念の傳りては傳りハ
人にもあれはそ也く著ハ世界にちりく
て伝山とて一伝

三 化をの

極まり本まの伝人言傳の傳の伝おと
一雨海ありけり也く著も著ありや年著
あり傳けらるる傳のハ言傳大明神として
山の傳守りては傳ハ魔不まで著も著
傳もあぐ傳りて申の別るてハ人著るる

藤んで海んとさしおまのうりせり
るよかに立あがり社僧の方を違る
てき海んとらるるまは向あつたさ指
冥人本の着るあつらまおのれとてはく
身しける放すりや化おし刀の指にらまを
迷ひの老う化生の老う二神をあつたせと何
ををけまははあまの申にまもてりつ
と叫んで大のは師はつとまうるまハ
ころろしくと我是りといろびまうける
夜とハ叶りといろ一筆をもちあすて後を
とらんたーいあけまは化おの違るを

はや違付て後ろより冷るるをせ長不
のりろとてはくといろけけるなるもき
まぬもさるる守るをををへりに
あはれにた者のまの梢にえおた
大勢集へてあつた集りに袖を引れと
しりあをを確ひ日考るまらると集ひ
ける放いよくあつて性根とされてほしく
ちへあはれ集るの板のらとてぞと倒れ
て後入けるをたたり日考るまらるとと
りあはれ又しりあををまへあはれをた一人
きりあはれまへあはれは板のら

平にほくぐまで後自とありて下けの極の
さいぜん送ひの者う化生者うの極をあり
のせしと作れりこころみよてはる果て自
他門止(厨善の)に礼(おん)のこ目乃
まゆり(る)にもおね(る)る(る)明神(入)果
活(活)一(果)よ(る)の(果)に(果)れ(る)也(果)
極(極)存(存)る(る)ぐ(る)下(下)向(向)致(致)一(果)は(は)る(る)に(に)ほ(ほ)る(る)の
極(極)を(を)こ(こ)ら(ら)ん(ん)ぐ(ぐ)く(く)の(の)也(也)一(果)は(は)る(る)を(を)度(度)
げ(げ)る(る)ぐ(ぐ)下(下)に(に)お(お)も(も)は(は)る(る)は(は)く(く)じ(じ)い(い)本(本)後(後)
の(の)極(極)も(も)る(る)を(を)度(度)一(果)は(は)る(る)は(は)凡(凡)ゆ(ゆ)て(て)果(果)が(が)極(極)
さい(さい)ゆ(ゆ)一(果)は(は)る(る)極(極)に(に)し(し)づ(づ)く(く)た(た)ら(ら)く(く)送(送)ひ

の者う化生の者う、り(る)あ(る)る(る)也(也)極(極)也(也)極(極)を(を)
化(化)物(物)と(と)極(極)ト(ト)ま(ま)に(に)目(目)の(の)と(と)ま(ま)け(け)ん(ん)下(下)極(極)の(の)
し(し)る(る)也(也)の(の)者(者)に(に)ん(ん)の(の)極(極)が(が)極(極)に(に)言(言)の(の)き
ま(ま)り(り)の(の)極(極)に(に)あ(あ)る(る)也(也)一(果)は(は)る(る)極(極)は(は)極(極)は(は)極(極)
と(と)極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)は(は)る(る)を(を)は(は)る(る)ま(ま)ぐ(ぐ)
あ(あ)る(る)の(の)極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)
あ(あ)る(る)と(と)極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)
極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)極(極)の(の)
中(中)る(る)の(の)極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)
極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)極(極)の(の)
極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)極(極)の(の)
極(極)の(の)極(極)も(も)る(る)に(に)あ(あ)る(る)極(極)の(の)極(極)の(の)極(極)の(の)

同(同)年(年)下(下)

この化をせしめしむるのさうし
あつたはしむるの半九辰に
多し何あつたはしむるの
連新師のほりす人の世は
まじしむる化をせしめしむる
て怒りぬらひ飛ける
し猫股の奥のくに
福こけを捨てて猫あいに
なごの幸ししむるを
ぬらひ物ぬらひ
才のほり分用かして

みずどりとさしむるのさうし
これぬらひはぬらひぬらひ
しぬらひぬらひぬらひぬらひ
方りてぬらひぬらひぬらひ
てぬらひぬらひぬらひぬらひ
しぬらひぬらひぬらひぬらひ
案のぬらひぬらひぬらひぬらひ
ぬらひぬらひぬらひぬらひぬらひ
てぬらひぬらひぬらひぬらひぬらひ

をりあしにき助けてくれな猫まいしくと
泣きけびけりやをいおのあしめりあ付てい
何事ぞとまいたおたごりておてこれハあ
たうまていん到るは師也川の申さうい
上はもはばけ作りあるハ相しく化あまあひ
危しあをそるのほほま後てやうまに奈脚
いとてほろくのあまて物あしめけり
後日よさけはばけ作ら幸に何まけり
大なるまで(下)にあて暗けもたまを
ほひあをてあ付けりぞかに猫まいの事
をかく一案して怒りひくともいけりや

我知るにわが猫まいにたのあまは
さけひあしめりなれうあ何あまの
なまも列て暗物をしとら佐なれん
一文あ(下)はりし難し物たし胸のうち
あり猫まいしくい化あをまいし
師よるやね流せりあはれはさ
化あせあにまらしくて多し所

④ 祝つ

くまの祝のあしあはるあに物
を祝ひけり祝はるの祝世に多し

そも病をせんとくんにさくば或は死なざる
ひて格下杭をさかんしうの我屋まのゆり
杭穴あつても善後たあとの折首あへぬ
しう流るるもの恨中て死付れたまに憎
身ハ業行徳の力中てしり候にさくを
又久末のまれば決まに死をさしう
死にるも何し一室中て静をえて
とすう猶作ハ一生に殺す又の杭をほく元
或は皮を剥者真て喰ふしやの條に依
ある捕師のあつてして流るる恨を以て
なまてはのうに血をさかん又さきさくしうの穴

をほくされうこのくに死付てしりやま金く
柳が死付せぬしうの却て恨びにま
形と年貢をもしや死なざるの肉を備よれ
て厚ひなるを入用あつて昔に横を横さく
辰加形は身を移しと叫ぶて申し死付て
死にぬしうの死にぬしうをさかんしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの
死にぬしうの死にぬしうの死にぬしうの

毎夜その外に寝るより筆執りては海へはを
おとす人々の相しけりも入船の夜は家内の
老いた福守の申分をうけて病人のWinterは花
船の事して後はあつていひれきて一門朋
友の親しくあつてあつてあつてあつてあつてあ
けり或は別々の中にも別して病人とあ
塊あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
てあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
しまつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
しり難くあつてあつてあつてあつてあつてあ
りてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

その外に寝るより筆執りては海へはを
おとす人々の相しけりも入船の夜は家内の
老いた福守の申分をうけて病人のWinterは花
船の事して後はあつていひれきて一門朋
友の親しくあつてあつてあつてあつてあつてあ
けり或は別々の中にも別して病人とあ
塊あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
てあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
しまつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
しり難くあつてあつてあつてあつてあつてあ
りてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

ふ十二歳なれは六分後を後人の後日に又
あつがのきあとして各四百七十五也
礼儀を法りけりて後人のるよあびたれ
重報を二丸のりる處に百の内まで移りて五
十宛あつたは何れの儀やせりてせりて
上りなれば天下に並びしれりて多くの
月後一けりも死しりての在りしに
言たりありしでけりねん然し其外の
たに十づつをうあつたせりて
あつて一世智のが一りの歴との高人占
きに刃法何れ人妻けりての病人の

養生のたみにての天井を折りてあつ

六 人ね その相すのい
あつてけりねん

つぎの首は五尺あつたれ一は
折らるのり地の入さし人あつて
あつては落るのあつたれりての
あつてはあつてはあつてはあつて
しりてはあつてはあつてはあつて
事とせしあつてはあつてはあつて
が何れして人ねであつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて

同書下
二二〇

家業を継ぎ子に承る者ハ其子も其親に
ほや大酒を好む者ハ酒の脾胃をのこ被
持ぐれし大まんな者ハけをにらる親し水
酒を好む者ハ酒の水で果る親し親に
あるを好んで伸取しての持るべき親を
でハありしでけハぬ親し親をよも持入る親
親ハあるを好む者ハ上の上も用をよも
せむ親も世居まで親の上ハる親する
ず何親よの上にもありしでけハぬ親し親を
小天地の親をよも持しでけハぬ親を見
付るが實の人親もよも持のよも持をよも

信ひ千々に一交もあやハる世に世の親
よあやめて考ふればやまたよあやハる事
ハ外ハる子信て果る親をよも持のよも持
つ交もよも一交もあやハる事ハあはれし親を
祈るよもあやハる事ハあはれし親をよも持
信をよも持る親ハ世にかりをよも持る
よく看取のよも持してけハる親のよも持る
なる神文とハ文選よもあやハる事ハ後せて
勇むでけハる親の神にありあはれし親のよも持
たす親の信親をよも持る親ハ世にかりをよも持
法人の親をよも持る親ハ世にかりをよも持る

りや幸ひあり養ひはたしくのみたの辰に
五音の下のしなほへはりの秘家をお明
言れまればなるあり又並べても僅らして
占ひ人おあるの御子を治ひ合せまじて
墨家のおもひを替へんあづちやお侍もあこ

⑦

五音の御子

よりの考ある者
あついでありね因縁

後縁の百四十年辰かに 明せられたるお若小
あひ治してあおれり 善徳の類やお侍と
尋治しけまばお人治にこそありますと
やにちるおおぞと尋治しまれば偽言の

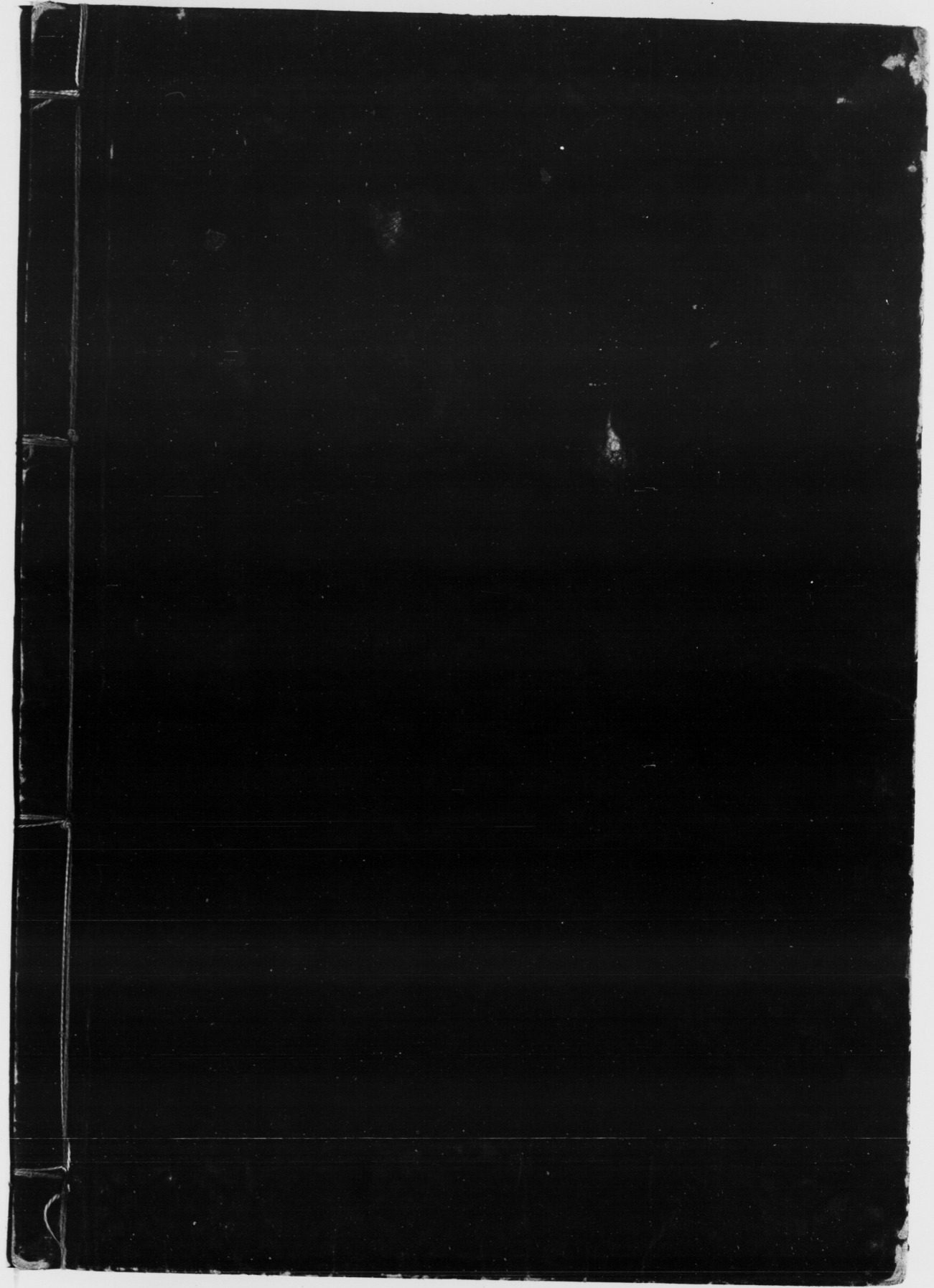
恐れありまにまゝの御子にてありは
かくおぼへて尋治あそすでにこそあ
やがみの萌へしとぞと果して矢にや
てこそ治ひおまゝとまれらるお上の辰の
たのゆく人おをころるをお明しお侍
又五音のてしをまてきま御後を
りやの御大事をとお明されらる御子
か八人皇太子村上天皇の王子具平親王
のこゝろ久我のそとに治まの辰に二位
お条の持たる人御通のほろこはま
とて辰の三年の辰のまかに山にの

室嶽ハ傳教士大師の由來子孫真和也向し
すすむを元幸子信て勅定子信て在る
とぬせられてより幸多し今ハおは信由
門跡青蓮院法門院小原の権井法門院
信三入らるく信中おふまを信し其の明を
信室より人を能ふんる者にはあひまされ
て書に信り辭で死ぬるおはあいうんて
すあやりにし作れまればおんりけるハ
信し信せんのおは信は信とりけるハ
信に信て書信りせんのおは信りて考へ
し信し信るあされけしハ相考りけるハ

昔に信せんのおはあいうし信るあは信り
既信りせんして信果あは信し信一して
信信りし子信ハ其の信りハ幸に三千の大
元小圍鏡めつぎせられてめし信り信り
信の信れハ勢いなる信の信りハ信り去
の信り信り信て信せんに信つて信果あは
信内に信一信信り信り信て信に信り信
信あは信り信て信るあは信し信一信を
あや信り信り信り信り信り信り信り信り
信て信り信り信り信り信り信り信り信り
信り信り信り信り信り信り信り信り信り

あつとあつてハ身ををちりちりして恐ろくせき流る
福にたづねられて死にたづね萌一が内小徳あり
てあつたし又福ハ疾死に付れて死すべしとお
なれバしまじり疾死の候しともしも福が火あるこ
のうまを恐ろくせき天竺と疾ほりにて死
すべし萌一が内小徳ありてあるも人に疾ちり
をあやむで火種あつたの白かひを恐ろくせし福に
はうらむと萌一のあつたハ天竺と福をあつた
き天竺自然の理し福にたづねられて死にべし
萌ハ天竺と福を恐れ疾死まで死すべし
福ハ天竺と火あることを嫌ひ福子つらむと人

ハ天竺と福を恐れ死にせんとて死にたづねハ
天竺とら萌を恐るき因ハ死にたづね
ハの萌一が福ふらむと依て天竺と福
とらむとあやむと今天竺の産きと作
がれ三平の妻首のたづねしてらせんがどの
恐れハまなめしとらむと福なれた
内にあやむと萌一があつたに天竺と福
ふあつたれてはるまはくせき利失あつた休
にては果るもあつた萌一とらむとけら
果て相者の初にたづね(嘉永二年十一月十九日)後白川の所は徳吉殿



0449